

入植の歴史を伝える

岩手日邦 2017年10月3日付

海外県人会だより ブラジル

海外県人会 だより

ブラジル

戦後移住地として栄える
ブラジル・サンパウロ州の
グアタパラ入植50周年記念
式典と収穫祭は7月22日、

現地で行われた。県人が入
植した記録が残る地でもあ
り、サンパウロ市から約3
00キロ北に位置する現地へ
向かった。

先人慰霊祭には、在住者
や元移住地出身者、サンパ
ウロの主要団体のメンバー

入植の歴史を伝える



屋根付きの保管所に展示されていた揚排水ポンプ。入植地の苦闘の歴史を物語る

らが参列。花を供えて霊を
ねぎらった。収穫祭の展示
場には、主要産業である鶏
卵、レシコン、果物類のほ
か、さまざまな野菜が並び、
歴史を物語る写真展も開か
れていた。

ブラジル岩手県人会は現
在、県人移住者と子弟らに
関する数々の資料を整理し
ており、その中で、1933
年に佐々木豊五郎さん一家
(旧川井村出身)が当地に入
植していたことが分かった。
その後、5、6回転住し
イビウナ市にいたことが記
録に残っていた。他の県人
がいた記録も出てくると思
う。

グアタパラ地方は08(明
治41)年、第1回移民船笠戸
丸輸送監督の平野運平が移
住者を引き連れて入植した
日本移民ゆかりの地。グア
タパラ移住地周辺には、戦

前に県人移住者がいた記録
があり、当時低地では主に
米作に従事したという。モ
ジグアス川近くに水田を造
成したが、当時の低地や川
周辺ではマラリアが発生。
当時、特效薬はなく病院も
遠かったため、多くの人々
がマラリアに倒れたという
記録が残っている。

グアタパラは戦後、日本
の外務省管轄の移住振興会
社(JAMIC)主導で移住
地が形成され、開発青年隊
などが耕地造成に関わった
とされる。乾期は水不足、雨
期には洪水となり、水を川
に戻すためのかんがい設備
の必要性に迫られたよう
だ。

同設備は、50年代後半に
日本から訪れた技師2人に
よる約10カ月の調査を經
て、63年2月に日本から揚
排水ポンプが到着、JAM
ICが施工を担当したとい
う。

そのポンプは現在、移住
地内の鳥居がある広場に保
管されていた。屋根付きの
保管所には、ポンプが2基
あり、4気筒、6気筒のエ
ンジンによってサイズも異
なっていた。使命を終えて
大事に保管されていたポン
プは、植民地の皆さんの歴
史を物語っているようで、
脳裏に深く刻まれた。

(ブラジル岩手県人会会長
・千田曠^{ひろゆき}さん＝金ヶ崎町
出身)